

# 民族、地域、セクシュアリティ —満洲国の朝鮮人「性売買従事者」を中心として—

## Nationalism, Localism and Sexuality: The Case of Korean Prostitution in ‘Manchuguo’

李 東振  
LEE DONG-JIN

慶北大学社会学科  
Kyungpook National University

### キーワード

満洲国 朝鮮人 民族 地域 性売買 セクシュアリティ

### Keywords

Manchuguo; Korean; ethnicity; region; sex trafficking; sexuality

原稿受理日: 2020.1.21.

*Quadrante*, No.22 (2020), pp.39-62.

### 目次

1. 序論
2. 満洲国の性売買従事者に関する二つの統計
3. 満洲国の朝鮮人「芸妓・酌婦・女給」
4. 満洲国の朝鮮人「妓女」
5. 満洲国性売買従事者の民族間・民族内位階
6. 結論

### 1. 序論

「新女性」とは一般的に新式の教育を受けた女性を指す。しかし新女性を「新たに出現した女性」という意味に広げれば、新女性には「新しい職業女性」を含めることができ、そうならば「性売買従事者」も新女性に含まれる。「性売買」自体は近代に出現した現象ではなかったが、性売買制度としての「公娼制」

は明らかに近代的な現象だった<sup>1</sup>。こうした意味で、性売買は恋愛とともに近代的セクシュアリティを構成する。「恋愛」は、「女学生」の専有物ではなかった。性売買従事者のなかでも恋愛を経て同棲したり結婚したり<sup>2</sup>、見捨てられたり、甚だしくは「情死」に至るケースもあった。このように、前近代の「妓生」の一部がそうであったように、性売買と恋愛は重なりあうこともあった。しかし近代的セクシュアリティとしての性売買と恋愛は、最も異質な二種類のセクシュアリティとして、前者は貨幣（または権力）を媒介とした一方、後者は「ロマンチックな愛」を媒介とした。

ところが、韓国の場合には、近代性そのものがそうであるように、性売買という近代的セクシュアリティもまた植民地的セクシュアリティ

\* 本稿は韓国学中央研究院『精神文化研究』28 (3)、2005年9月に掲載された同名の論文を訳出したものである。文中の（ ）は原注、〔 〕は訳注を示す。本稿に頻出する性売買という用語は2000年前後の韓国で女性学の視点から「売春」「買春」などの用語の見直しが行われて使われるようになり、2004年「性売買防止法」制定後に一般化した。また性購買者とは買春男性をさす。なお、日本に由来する法令名や用語は、日本でのそれに統一した。貸座敷は娼妓が性売買する場所、遊郭は貸座敷業者が営業を許された地域を指す。

<sup>1</sup> これについてはキャスリン・バリー著、チョン・クムナ、カム・ウンジョク訳『セクシュアリティの売春化』（サミン、2012）を参照せよ。〔訳注〕原書はKathleen Barry *The Prostitution of Sexuality* New York: New York University Press, 1995. 日本語訳は未刊行。

<sup>2</sup> 一例として、アン・ミヨン「1930年代小説における女給の考察: 李箱の女性観を中心に」『女性文学研究』第3号（2000）を参照せよ。



として現われた。つまり、それは「公娼制」のように「移植されたセクシュアリティ」であり、「日本軍慰安婦」のように「収奪されたセクシュアリティ」だった。これまで近代的あるいは植民地的セクシュアリティに関する研究として、恋愛、公娼制、日本軍慰安婦、妓生、女給、カフェなどに関する研究が行われてきた。このうち日本軍慰安婦に関する研究は、口述資料の収集や現地の資料調査、政府文書の調査などを通じて、植民地セクシュアリティのなかで最も多くの研究がなされた分野である。ところが、日本軍慰安婦の資料を見ると、彼女たちは多様なルートを通じて「強制連行」され、なかには公娼制につながる部分もあったことがわかる<sup>3</sup>。にもかかわらず、性売買従事者のうち慰安婦に最も近い位置にあった「酌婦」や「娼妓」に関する研究は、「妓生」や「女給」に関する研究（これらの研究も最近になって行われている）に比べて十分ではないものの<sup>4</sup>、公娼制とともにある程度行われたのは確かだ。しかし、いまだに朝鮮外における朝鮮人の公娼制と性売買従事者に関する研究はほとんど行われていない。

このような問題意識から、本稿は満洲国の朝鮮人性売買従事者を検討するものである。当時、満洲は朝鮮から渡河するだけで行ける近い距離にあり、さらに鉄道でつながっていただけでなく、事実上日本の統治下にあった。このため満洲は、日本内地とともに朝鮮外の朝鮮人人口が最も多い地域だった。ところが、満洲には朝鮮人人口比率に比して多くの性売買従事者がいた。そして、これまでの慰安婦被害者の証言資料を見ると、朝鮮人女性が慰安婦として最も多く連行されたところも、そして

朝鮮外の朝鮮人慰安婦が最も多く居住しているところも、満洲だった。本稿は、満洲の朝鮮人性売買従事者の実態を、主に政府が公表した公式統計、当時の満洲国で発行されていた朝鮮語新聞の『満鮮日報』の記事に載った統計を通じて、考察する。そして朝鮮人性売買従事者を表す数字の意味を知るために、満洲国の性売買制度と、満洲国の性売買制度のなかでの朝鮮人性売買従事者の位置を検討する。

満洲国は多民族（公式には漢族、満洲族、モンゴル族、朝鮮族、日本族の「五族」）国家である。朝鮮人は国籍においては日本人だが、日本内地人（「日系」）とは区別された朝鮮人または半島人（「鮮<sup>ママ</sup>系」）である。日本人との関係ではその地位は依然として「植民地人」だったが、中国人（公式には漢族、満洲族、モンゴル族を含む「満洲人」または「満系」）との関係においては、部分的には日本人の地位を享受することもあった。これに対し、中国人は朝鮮人を「二等国民」と呼んだ。しかし、実際に少数民族である朝鮮人が「三等国民」ではなく「二等国民」だったかどうかについては議論の余地がある<sup>5</sup>。本稿では、満洲国の性売買従事者のなかでの朝鮮人性売買従事者の地位を検討することによって、朝鮮人の地位の一断面を考察することを期したい。

## 2. 満洲国の性売買従事者に関する二つの統計

満洲国は「位階的多民族主義」という政治的状況を反映し、性売買制度も民族別に位階化、分節化していた。日本人は大連の租借地（関東州）と南満洲鉄道附属地で「事実上の」公娼制を行った。日本内地や台湾、朝鮮と

<sup>3</sup> 「制度」としての公娼制が日本軍慰安婦につながるという主張については、尹明淑「日中戦争期における朝鮮人軍慰安婦の形成」『朝鮮史研究会論文集』第32号（1994）；宋連玉「大韓帝国期の〈妓生団束令〉〈娼妓団束令〉」『韓國史論』第40号（1998）を参照せよ。

<sup>4</sup> 彼女たちは当時も現在も声を上げることができなかった。1927年に妓生が『長恨』という雑誌を発行し、1934年に女給が『女聲』という雑誌を発行したが、酌婦と娼妓はこうした文筆から排除されていた。もちろん妓生と女給も、「新女性」の文筆からは排除された位置にあるのは同じだった。そして、「新女性」自身も当時の文筆からほとんど排除されていた。多くの女性雑誌記事の取材対象や作家は男性だった。

<sup>5</sup> 一例として尹輝鐸「満洲国の二等国民（公）民」『歴史学報』第169集（2001）を参照されたい。

いった日本外地で行っていた公娼制とは異なり、「遊廓」がなく、したがって「娼妓」もいなかったが、料理店や飲食店にいる「酌婦」が事実上の娼妓であった。一方、中国人の性売買制度には、伝統的な性売買業態として「妓館」（または妓院、妓楼）があり、その性売買従事者は「妓女」と呼ばれた。こうした二種類の公娼制が並存していたが、統計では両者を区分する方法がなかったため混在することになった。このように、満洲国の性売買業統計には、日本人性売買制度でとらえた統計と中国人性売買制度でとらえた統計の二種類があったのである。

満洲国の朝鮮人性売買従事者も朝鮮内と同様、実際には「妓女」ではなく、「芸妓（妓生）、女給、酌婦（事実上の娼妓を含む）、ダンサー」などとして存在していたが、統計上では「妓女」と分類されることもあった。1940年の朝鮮と満洲における朝鮮人性売買従事者の分布は、表1の通りだ<sup>6</sup>。

統計では、朝鮮にはダンサーがおらず、満洲には娼妓がいなくなっている。朝鮮にはダンスホールがなく、したがってダンサーは実際にいなかったのだが、満洲には事実上の遊廓があり、実際には酌婦が娼妓を兼ねて

もいた。このように、朝鮮と満洲の性売買制度（性売買従事者の分類体系）が異なったのは、朝鮮と満洲の政治的な状況が違っていたからだ。日本内地（沖縄を含む<sup>7</sup>）と台湾<sup>8</sup>、朝鮮では同じ公娼制（遊廓制）が実施されたが、日本が日露戦争の勝利で占めた関東州と南満洲鉄道附属地では同様の公娼制を行うことができず、この状況は満洲国樹立後も変わらなかった。この過程について見てみよう。

日本の性売買制度である「貸座敷を施設とする公娼制」は、1872年に〈娼妓解放令〉を公布して幕府時代から続いてきた公娼制を廃止し、翌年の1873年に東京府令第145号として〈貸座敷渡世規則〉と〈娼妓渡世規則〉を公布したことで成立した<sup>9</sup>。この制度が日本人の海外居住地のなかで最初に登場したところが、朝鮮だった。朝鮮では、1881年に釜山と元山で日本領事館令として〈貸座敷営業規則〉、〈芸娼妓営業規則〉、〈梅毒病院規則〉、〈梅毒検査規則〉等を公布して、貸座敷・娼妓の営業を許可した<sup>10</sup>。ところが、1883年に開港した仁川の場合は、釜山、元山とは違って日本と清国の専管居留地のほかに外国人共同租界が入る予定だったので、日本の性売買制度を実施すれば国家の体面が傷つくおそれがあった。

【表1】1940年の朝鮮と満洲における朝鮮人性売買従事者の分布

地域	芸妓	酌婦	娼妓	計	女給	ダンサー	合計
朝鮮	6,023	1,400	2,157	9,580	2,145	--	11,725
満洲	126	3,586	--	3,717	736	28	4,476

出典：『朝鮮総督府統計年報』各年度；宋連玉「日本の植民地支配と国家的管理売春：朝鮮の公娼を中心にして」『朝鮮史研究会論文集』32（1994）、58頁；満洲國治安部警務司、『第四回警察統計年報』（1942）、230-232頁。

<sup>6</sup> 1940年は朝鮮の性売買従事者の数が最も多い年だった。1942年には性売買従事者が女給を除けば7,942人で、女給は2,227人と1940年よりやや増加した。

<sup>7</sup> 戦争末期に朝鮮人慰安婦たちがいた沖縄の性売買業を見ると、1939年11月（那覇警察署保安課による調査）には芸妓が287人、酌婦が255人、娼妓が845人、料亭（原文は藝妓置き屋）が200軒、料理店が109軒、飲食店が439軒、貸座敷が250軒であった。韓国政府女性部『2002年国外在住の日本軍慰安婦被害者の実態調査』（女性部、2002）、163頁。

<sup>8</sup> 1940年に台北市で台湾人が最も密集した大稻埕に位置した25カ所の妓館のなかには、朝鮮楼、新鮮楼、半島楼など朝鮮人を雇用した妓館が少なくなく、ここで生活する全220人の娼妓の中で42人が朝鮮人女性だった。又吉盛清『日本植民地下の臺灣與沖縄』（臺北：前衛出版社、1997）、72頁〔同『日本植民地下の台湾と沖縄』沖縄あき書房、1990年〕（キム・ヨンシン「日帝下韓人の台湾移住」『国土論叢』第99号（2002）、204頁から再引用）。

<sup>9</sup> 竹村民郎『廢娼運動』（1982）、2-3頁（（1998）、218頁から再引用）。遊廓での営業を「貸座敷業」という名称は、性購買者〔買春者〕に座敷だけを貸す業者であるかのように見せる造語だった。

<sup>10</sup> 釜山の〈貸座敷営業規則〉、〈芸娼妓営業規則〉などは、宋連玉、前掲論文、220-222頁を参照せよ。朝鮮においてのみ遊廓・娼妓の営業を許可したことについて、日本の外務省文書では「当時やむをえず一旦公許した」〔韓国語からの翻訳〕と記されている。日本外務省「明治十六年十月十六日起草・貸座敷営業及娼妓営業廢止方」件省議『韓國警察史』第1巻、387-388頁（前掲論文、223頁から再引用）。



仁川領事が釜山、元山、ウラジオストクの場合と同じように貸座敷営業の許可を要請したことに対し、日本の外務省は仁川での貸座敷営業を許可しなかっただけでなく、釜山と元山の遊廓営業も1年を期限として廃業するよう指示した<sup>11</sup>。

だからといって、朝鮮の日本居留地での日本の貸座敷営業が完全に消えたわけではない。一例を挙げれば、1887年に釜山領事が貸座敷営業者の死亡した場合の営業権の継承について問い合わせると、外務省は再申請者や新規申請者には貸座敷営業を許可できないものの、以前からの営業者やその妻子は営業を継続できるという解釈を下し<sup>12</sup>、仁川・ソウルとは違って、釜山や元山では従来の貸座敷営業者に限り営業を許可した。そして仁川領事館も、1892年には〈芸妓営業取締規則〉を發布して芸妓を公認した<sup>13</sup>。こうして朝鮮の日本人居留地では貸座敷を料理店と称し、娼妓を芸妓または酌婦と称する方式、言い換えれば、実際は公娼制と違いがないが、表向きは公娼制ではない形式をとった<sup>14</sup>。釜山では事実上遊廓での「特別料理店（または乙種料理店）」が盛んだったが、これをまねて1902年に仁川の已井洞に17軒の料理店が共同事業として特別料理店敷島楼を開設した<sup>15</sup>。ここにいた芸妓（乙種芸妓）は娼妓にはかならなかった。

朝鮮人性売買従事者に対しても、大韓帝国政府が1908年9月、警視庁令第5号と第6

号として〈妓生団束令〉と〈娼妓団束令〉をそれぞれ發布し、性売買従事者を「妓生」と「娼妓」に分類した<sup>16</sup>。この法規は、1900年に日本で公布された〈娼妓取締規則〉を参考にして制定したもので<sup>17</sup>、付属文書によると妓生は官妓を含む妓生全体を指し、娼妓は賞花室、<sup>サンファシル</sup>蝸甫、<sup>カルボ</sup>色酒家の酌婦の総称と規定した<sup>18</sup>。したがって、上記の法規上の娼妓には酌婦も含まれていた。

遊廓を中心とした日本式公娼制はすでに実施されていたが、それが法規として登場したのは1916年3月警務總監令第3号〈芸妓酌婦芸妓置屋営業取締規則〉と第4号〈貸座敷娼妓取締規則〉だった。こうして朝鮮における性売買業は、旅館（第1号）、料理店・飲食店（第2号）、紹介業（第5号）などとともに、警察の管理対象となる「保安営業」に属することになった。

大連租借地でも、最初は日本の公娼制が実施された。現地の軍当局は、1905年12月に大連の逢阪町に遊廓を設置して、軍の管理下に妓楼の設置を許可した。これは日本軍（遼東守備軍）が兵士と私娼との遊興防止策として、娼妓の登録と性病検査を強制するためのものであった<sup>19</sup>。逢阪町遊廓は、「十五軒〔妓楼〕の外に飲食店、小間物店等三四ヶ所ある、兎に角事務所を中央に設け三十六名の芸妓と百六七十名の娼妓を収容して営業して居る」<sup>20</sup>。1907年に大連の料理店は160軒を越

<sup>11</sup> 宋、前掲論文、223-224頁。

<sup>12</sup> 宋、前掲論文、226頁。

<sup>13</sup> 宋、前掲論文、226-227頁。

<sup>14</sup> 宋、前掲論文、231-223頁。

<sup>15</sup> 仁川府『仁川府史』（1933）、1472頁（宋（1998）、238頁から再引用）。

<sup>16</sup> 朝鮮人性売買従事者が公娼制に編入される過程については別途の研究が必要だが、日本の公娼制が影響を及ぼした点が指摘できる。例えば、1891年に仁川で日本人居留民や兵士らを相手にする朝鮮人性売買業が存在し（村上唯吉「朝鮮通信」『女學雑誌』286（1891）、10頁；宋（1998）、234-236頁）、1895年に釜山で日本人業者が、ソウルで朝鮮人を募集し釜山で性売買業の開業を申請した（本川源之助「朝鮮釜山通信」『女學雑誌』412（1895）、7頁（宋（1998）、236頁から再引用））。

<sup>17</sup> 日本の公娼制については Garon, Sheldon, "The Worlds Old Debate? Prostitution and the State in Imperial Japan, 1900-1945," *American Historical Review*, 98-3 (June) 1993を参照。

<sup>18</sup> 宋、前掲論文、259-261頁。

<sup>19</sup> 竹村民郎「公娼制度の定着と婦人救済運動」『環』第10号（2002）、328頁。

<sup>20</sup> 15軒の妓楼のうち13軒は「楼」という名称を使用し、残りは「松の家」「金岡」と料理店の名称を使用した。『満洲日日新聞』1907年12月27日付；竹村（2002）、328-329頁から再引用。

える。そのなかで最大規模を誇る千勝館には、芸妓が31人、女性従業員（原文は仲居）が11人いた<sup>21</sup>。1907年5月、大連には芸妓が167人、酌婦が283人、娼妓が113人、中国人娼妓が76人いた<sup>22</sup>。

しかし日本領事館の管轄地域である開放地（商埠地）では、日本の公娼制を実施できなかった。一例をみると、1907年下半年に南満洲鉄道附属地を除いた開放地（商埠地）を管轄した奉天日本人居留民会が最初に賦課金を徴収したが、そこに芸妓と酌婦も含まれていた。彼女たちに対する賦課金は3,600円（毎月芸妓と酌婦からそれぞれ3円と2円ずつ徴収して酌婦の数300人と推定した金額だった）で、在住者一般部課金2,400円よりも多かった。居留民会では賦課金の徴収に際し、芸妓と酌婦に許可証（鑑札）を与えた<sup>23</sup>。

大連でも領事館管轄地域のような性売買制度に転換された。ある研究者は1909年以降に満洲で日本人が貸座敷を料理店と称し、娼妓を芸妓または酌婦と呼んだ日露戦争以前の仁川と同様の性売買制度を実施したと述べた<sup>24</sup>。この研究者はその根拠を明らかにしておらず、また満洲に大連も含まれるのかを確認できないが、公娼制を実施するために1905年と1906年に公布した一連の関連法規<sup>25</sup>のなかで貸座敷と娼妓に関する法規だけがそれ以降に改訂されていないことからみて（おそらく

撤廃されたのだろう）、大連でも貸座敷と娼妓が廃止されたものとみられる。

では、なぜ満洲では、朝鮮とは違って、遊廓や娼妓という名称を使えなかったのだろうか。これを見るために、再び大連での性売買業の状況に戻ってみよう。1906年には、「金髪夜叉」と呼ばれていたロシア人性売買従事者が、しだいに大連からハルビン（哈爾濱）、奉天〔現：瀋陽〕、芝罘（現在の煙台）、北京などに移り、残った店は4軒のみだった。大連での外国人娼館地である小崗子には、中国人の貸座敷（中国人は妓楼と呼んだだろう）も40軒あり、そこに中国人性売買従事者が70人余りいた<sup>26</sup>。

しかし日本人の性売買業は、中国人や他の外国人の性売買業とは異なっていた。大連では「公娼制が公認され、娼婦のほか博徒が胸を張って徘徊し、私生児や死産が増え、私生児は中国人に売られた」<sup>27</sup>。このような光景を見ていた中国人や他の外国人たちは、日本人を酒や女、賭博に溺れていると軽蔑し、これが排日思想を醸成する一つの要因にまでなった。これを受けて大連では性売買従事者を対象とする「婦人救済運動」が活発に推進された<sup>28</sup>。このような状況を見ると、大連の場合も仁川の例のように、外国人に対する体面と公娼制廃止の動きに影響され、本来の公娼制が廃止（実際には修正）されたものとみられる。

<sup>21</sup> 『満洲日日新聞』1908年1月29日付（宋、前掲論文、330頁から再引用）。

<sup>22</sup> 『福岡日日新聞』1907年12月18日付（宋、前掲論文、331頁から再引用）。

<sup>23</sup> 野田涼編『奉天居留民會三十年史』（奉天居留民會、1936）、17-18頁。

<sup>24</sup> 宋（1998）、232頁；倉橋正直「満洲の酌婦は内地の娼妓」『愛知県立大学文学部論集』（一般教育編）、第38号（1994）（宋連玉「日本の植民地支配と国家的管理売春：朝鮮の公娼を中心に」『朝鮮史研究会論文集』第32号（1994）、38頁から再引用）。

<sup>25</sup> これらの法令は、〈芸酌婦及雇婦女取締規則〉（1905年関東州民政署（以下、民政署）令第2号、1912年関東都督府（以下、府領）、第4号、1916年府令第2号）、〈料理店飲食店下宿屋貸席待合茶屋引手茶屋営業取締規則〉（1905年の民政署令第4号、1912年府令第4号）、〈貸座敷取締規則〉（1905年の民政署令第12号）、〈娼妓取締規則〉（1905年の民政署令第11号）、〈娼妓健康診断施行規則〉（1906年の民政署令第2号）など。福昌公司調査部編『滿蒙通覽（中編）』（東京：大阪至誠書店、1918）、615-617頁。

<sup>26</sup> そのなかのある店の5人の中国人は日本人だけを相手にしたが、彼女たちはみな日本語ができた。『満洲日日新聞』、1907年11月12日付（竹村民郎（2002）、333頁から再引用）。

<sup>27</sup> 〔訳注〕竹村、前掲論文、333頁。

<sup>28</sup> この運動の参加者たちが主軸になって、1911年に日本で公娼制廃止運動団体である「廓清会」が結成された。竹村、前掲論文、333-336頁。

中国人性売買従事者の場合も、その悲惨さは日本人性売買従事者に劣らなかった<sup>29</sup>。中国の性売買従事者は、芸妓、酌婦、娼妓の区分なしにすべて「妓女」と呼ばれる代わりに、等級に分けられた。妓女の等級は、妓女が属する妓院の等級と関連づけられた。例えば、1900年に北京警察庁（京師警察廳）が城内にあった妓院を城外に移し、許可証を発給して賦課金を徴収し公式に営業を許可した。この時に許可した373軒の妓院のうち、一等妓院（小班、原語では堂または大地方）が78軒、二等妓院（茶室、中地方）が100軒、三等妓院（下處）が172軒、四等妓院（小地方）が23軒だった。

性売買業が最も盛んだった上海の例を見ると、計17等級の妓院があった<sup>30</sup>。上海の共同租界当局（工部局）が、1918年に結成された道德促進委員会（後の道德促進会）の圧力を受けて、1920年に「淫風調査会」という特別委員会を設立して調査した結果によれば、共同租界には一等の妓女が2,135人、二等の妓女が400人、三等及び私娼が4,500人、広東の妓女が200人、合計7,235人がいた。この数字には、外国の妓女、「台妓（女性を紹介してくれる場所）」、その他の準公的な妓女などは含まれていない<sup>31</sup>。

このような中国の性売買制度である妓院は、沖縄の遊廓である辻に類似していた<sup>32</sup>。辻は、1672年に当時の摂政によって付近の私娼を集めてつくられたもので、券番・貸座敷・料理店が一体化された形態だった。このような沖縄の性売買制度にも〈娼妓取締規則〉（1900）、

〈貸座敷営業取締規則〉（1910）が適用され、日本の性売買制度に編入されることになった<sup>33</sup>。いわば日本の性売買制度は、妓院が、券番（芸妓）、貸座敷（娼妓）、料理店（芸妓と酌婦）、飲食店（酌婦）——後にはカフェ（女給）——などに分化したものと考えられる。公娼廃止運動が展開されると、最も露骨な性売買店（従事者）である貸座敷（娼妓）が標的にされるようになった。

こうした二種類の性売買制度のうち、満洲の朝鮮人性売買従事者は日本の性売買制度に属した。一つの国家に二つの性売買制度があり、そのため二つの性売買の統計があったことは、満洲国の二重性をよく表している。朝鮮人や日本人、中国人は、実際は同じ者が二つの異なる種類の統計に、それぞれの分類にしたがって登場した。言い換えれば、朝鮮人と日本人の芸妓（朝鮮人の場合は妓生）と酌婦（事実上の娼妓を含む）は「妓女」に再分類され、中国人妓女は「芸妓・酌婦」に再分類された。女給の場合はこうした混同はなかったが、中国人の場合は女給がほとんどいなかった。妓女が女給のような技能を吸収できたためだった。中国人妓女の場合には私娼も最下級に含まれる可能性があったが、日本の公娼制では私娼は警察の統計からも排除された。

### 3. 満洲国の朝鮮人「芸妓、酌婦、女給」

満洲にいる日本の警察は、「保安関係営業調査」に性売買業を含めた。そして満洲国政府が治外法権撤廃直前の1936年1月に、料理店など17種目の営業を総括する〈営業取

<sup>29</sup> これについては、文芳主編『娼禍』（中國文史出版社、2004）を参照せよ。

<sup>30</sup> 平襟亞「舊上海彪大的娼妓隊伍」、同書、14-22頁；Hershatter, Gail, *Dangerous Pleasure: Prostitution and Modernity in Twentieth-Century Shanghai*, Berkeley: University of California Press. 1997；賀蕭『危險的愉悅：20世紀上海的娼妓問題與現代性』江蘇人民出版社、2003、41-56頁。

<sup>31</sup> 謝吾義「民初上海娼妓一瞥」、文芳主編、前掲書、30-31頁。

<sup>32</sup> これは朝鮮の妓生とも似ていた。朝鮮の妓生は一牌、二牌、三牌と区分されたが、一牌の妓生は宮中宴会に出席する妓生、二牌妓生は高官や士民たちに伴われ遊ぶ妓生、三牌妓生は性売に従事する妓生だった。中国の一等または二等妓院に該当するのは朝鮮の「妓生パン〔部屋の意〕」だった。尹白南「昔の妓生・今の妓生」『三千里』10月号（1935）、198-201頁。

<sup>33</sup> 韓国政府女性部、前掲書、163頁。



【表 2】新京満鉄附属地の性売買の状況

業種別	料理店	カフェ	茶房	料亭	芸妓	酌婦	女給	女子従業員 〔仲居〕	ダンサー	中国人 芸妓・娼妓
満洲 事変前	58	11	82	1	112	87	28	45	--	688
1932	73	17	149	1	325	139	129	170	27	808
1933	90	39	248	5	467	219	340	370	54	971
1934	91	50	285	8	505	234	407	545	53	1,065

出典：満洲事情案内所「観於數字新京」『満洲統計』（満洲統計協會、1936）、22頁。

注：上記以外の娯楽関係施設が58～91軒、劇場が3軒あった。

【表 3】1930年代前半 奉天市の日本人性売買業の状況

	料理店	料理店・ カフェ	朝鮮人 料理店	ダンス ホール	芸妓	酌婦	朝鮮人 酌婦	ダンサー	従業員・ 女給
1931年8月	38	97	18	--	240	80	132	--	329
1932年9月	45	166	20	4	308	115	164	120	568
1934年3月	66	317	25	6	446	178	273	25	864

出典：菊池秋四郎『哈爾濱と奉天（奉天の部）』（満洲視察東道社、1934）、148頁。

注1：従業員・女給には朝鮮人従業員30人を含む。

注2：上記以外に遊戯場が46軒あった。

締規則〉を公布し、満洲国でも「保安営業」に関する調査を実施した<sup>34</sup>。ここに満洲国朝鮮人性売買従事者を日本の性売買制度によって分類する統計が登場した。まず、1930年代前半、満洲国の首都である新京（満洲国の樹立前は長春）南満洲鉄道（以下、満鉄）附属地の性売買状況は、表2の通りだった。

新京満鉄附属地では、満洲事変後、満洲国の樹立により新京が首都になって、性売買業が急成長したことがわかる。カフェや茶房が新しい性売買店として登場した<sup>35</sup>。そして満洲で

は、朝鮮では不許可だったダンスホールが許可されていた<sup>36</sup>。上記の統計で、中国人は実際は「妓女」である者を、日本人性売買制度を使って「芸妓・娼妓」と表している。上記の統計では朝鮮人性売買従事者の人数を確認できないが、料理店のなかには朝鮮人料理店があり<sup>37</sup>、したがって朝鮮人酌婦と女子従業員（原文は仲居）もいた。

同時期の満洲国最大の都市である奉天（満鉄附属地を含む）における日本人（朝鮮人を含む）の性売買業状況は、表3の通りであ

<sup>34</sup> この時、保安営業に古物商が追加された。満洲國史編纂刊行會『満洲國史總論』（謙光社、1973）、490頁。

<sup>35</sup> カフェが日本各地で流行するようになったのは1927～1929年ごろであり、朝鮮で最初にカフェが新聞で報道されたのは1931年9月だった。戸川猪佐武『素顔の昭和 戦前編』（角川文庫 緑481、1981）、67-76頁；『東亜日報』1931年9月24日付、2面（孫禎睦「日帝下の賣春業：公娼と私娼」『都市行政研究』3（1988）、311頁から再引用）。カフェを性売買業態と言えるかについては議論の余地がある。しかし、朝鮮での例をみると女給が性売買をすることもあった。次の記事の見出しから推測できる。「営業不振エロサービス女給」『毎日新報』1934年11月8日付、7面；「妓生女給移動営業今後取締」『毎日新報』1937年6月2日付、2面。

<sup>36</sup> 朝鮮でのダンスホール不許可は『毎日新報』1937年5月18日付、2面を参照せよ。これに対し、レコード会社文芸部長、喫茶店のマダム、ソウルの3つの券番の妓生、映画と演劇の女優などが連名で、警務局長にダンスホールを許可するように手紙を送った。『三千里』1月号（1937）、162-166頁。彼／彼女らは日本内地の都市、中国の上海、南京、北京、そして近くは満洲の大連、奉天、新京にダンスホールがあるのに、特に朝鮮（ソウル）にダンスホールがないこと、そしてカフェと公娼を許可しながらダンスホールを許可しないことが不当であり、料理店と比べるとダンスホールの方が性売買にほど遠いという点を指摘した。

<sup>37</sup> この種の料理店は、朝鮮でも1910～1920年代に繁盛した。「料理店は組合に所属する妓生が伝統芸と歌舞を公演し、同時に酒と料理を売る商業的な空間だった。これは通時的に朝鮮時代の芸術及び社交、遊興の場であった風流部屋や妓房を継承するが、日本の券番システムによって新しく再編された近代的空間である。」ソ・ジヨン「植民地時代のカフェ女給研究：女給雑誌〈女聲〉を中心に」『韓国女性学』19-3(2003)、32頁。

【表 4】1941 年末 奉天市の民族別の性売買業状況

	料理店	券番	飲食店	カフェ	芸妓	酌婦	女給	人口
中国人	295 (76.2)	--	738 (66.4)	9 (13.4)	22 (4.0)	2,235 (75.4)	29 (3.3)	1,246,019 (82.7)
日本人	62 (16.0)	52 (100.0)	338 (30.4)	48 (71.6)	529 (96.0)	233 (7.9)	663 (74.7)	202,937 (13.5)
朝鮮人	29 (7.5)	--	37 (3.3)	11 (16.4)	--	461 (15.6)	195 (22.0)	56,767 (3.8)
その他	1	--	--	--	--	17	--	1,323
合計	387	52	1,111	67	551	2963	887	1,506,852

出典：奉天市公署・奉天市商工会『奉天市統計年報』（1941～1942年版）（1943）、20頁；奉天商工会『奉天産業経済事情』（1942）、2-3頁。

注：カッコ内は比率である。

る<sup>38</sup>。

満洲事変前に、開放地〔商埠地〕にいくつかあったダンスホールが関東庁の許可を得て再開業した<sup>39</sup>。朝鮮人が経営するダンスホールはなく朝鮮人ダンサーがいなかっただけでなく、朝鮮人が経営するカフェや朝鮮人女給も存在しなかった。1934年8月末、奉天満鉄附属地の遊興料理店の中では朝鮮人経営が2軒、日本人経営が46軒、中国人経営が11軒あり、日本人が経営するカフェが71軒あった<sup>40</sup>。

しかし1940年になると、朝鮮人は券番（芸妓）を除くすべての性売買業に進出した。1941年末時点の奉天市の民族別の性売買業状況は、表4の通りだ。

中国人はあらゆる種類の性売買業者と性売買従事者の割合が人口比率に及ばなかった一方で、日本人と朝鮮人、とくに日本人の場合はすべての性売買業者で、そして酌婦を除くすべての性売買従事者において人口比率を上回った。朝鮮人も飲食店を除くすべての性売買業者と、芸妓を除くすべての性売買従事者について人口比率を上回った。

日本人に酌婦の数が少なかったこと、そして朝鮮人には芸妓がいなかったことは、日本

人が性売買従事者の職種の中で上位職種を占め、一方で朝鮮人は下位職種を占めたことを示している。ただし人口に対する女給の割合で、なぜ朝鮮人が日本人よりやや高かったかは説明しがたい。また朝鮮人と中国人の性売買従事者を比較すると、朝鮮人は女給の割合が高く、中国人は酌婦の割合が高く示され、すなわち朝鮮人性売買従事者が上位職種を占めたことがわかる。

朝鮮人性売買業や日本人性売買業の割合を1930年代前半と比較すると、すべての分野で朝鮮人性売買業が増加し、とりわけ酌婦、カフェ、女給の割合が最も多く増加した。女給を除く性売買従事者の割合を見ると、中国人性売買従事者（妓女）が64.2%、日本人性売買従事者（芸妓・酌婦）が21.7%、朝鮮人性売買従事者（酌婦）が13.1%となり、人口比で見れば、朝鮮人性売買従事者の数が最も多かった。

これまで、大都市での性売買従事者の民族別、職種別分布をみてきた。全国的にはどうだったのだろうか。1940年末の「保安関係営業調査」による満洲国の省（特別市）別、民族別性売買に関する統計は、表5の通りである。

<sup>38</sup> 奉天警察署（満鉄附属地）と奉天総領事館（奉天市）の調査を合わせたものである。

<sup>39</sup> ブロードウェー（東浪速通）、明星ホール（加茂町）、オリンピック（八経路）、奉天会館（東浪速通の上部入口）、バビロン（三経路）、レクミナル（三経路）など。

<sup>40</sup> 菊池秋四郎、『哈爾濱と奉天（奉天の部）』（満洲視察東道社、1934）、36頁。



【表 5】1940 年末 満洲国の省（特別市）別・民族別の性売買業状況

		料理店		料亭		カフェ		芸妓		酌婦		女給		ダンサー	
		数	比率	数	比率	数	比率	数	比率	数	比率	数	比率	数	比率
合計	中国人	4470	78.2	3	2.2	96	11.1	662	11.9	19059	75.5	331	4.4	3	0.9
	日本人	749	13.1	132	97.8	641	74.3	4778	85.8	2264	9.0	6336	84.9	271	83.9
	朝鮮人	488	8.5			111	12.9	126	2.3	3586	14.2	736	9.9	28	0.3
	合計	5718	100	135	100	863	100	5566	100	25259	100	7459	100	323	100
新京特別市	中国人	140	80.0					37	6.0	1135	64.0				
	日本人	27	15.4	29	100	50	89.3	584	94.0	375	21.2	753	90.5	78	88.6
	朝鮮人	8	4.6			6	10.7			263	14.8	79	9.5	10	11.4
	合計	175	100	29	100	56	100	621	100	1773	100	832	100	88	100
奉天	中国人	1229	83.6	3	3.6	27	14.8	379	21.1	6009	85.2	58	3.4		
	日本人	174	11.8	81	96.4	130	71.4	1413	78.9	334	4.7	1524	90.5	117	97.5
	朝鮮人	67	4.6			25	13.7			704	10.0	102	6.1	3	2.5
	合計	1470	100	84	100	182	100	1792	100	7054	100	1684	100	120	100
吉林	中国人	339				1		36		1337		2			
	日本人	44				21		222		147		182		12	
	朝鮮人	47				8				312		48		12	
龍岡	中国人	369						9		1354					
	日本人	26						181		61		381			
	朝鮮人	14				28				101		3			
熱河	中国人	47				6				213		5			
	日本人	16		1		14		94		43		120			
	朝鮮人	1								11					
濱江	中国人	373	79.0			49	40.8	92	17.2	1855	72.8	232	23.8	3	2.9
	日本人	66	14.0	18	100	57	47.5	440	82.2	273	10.7	672	69.0	64	62.1
	朝鮮人	23	4.9			4	3.3	3	0.6	310	12.2	44	4.5	15	14.6
	合計	472	100	18	100	120	100	535	100	2547	100	974	100	103	100
錦州	中国人	130						6		700					
	日本人	25				23		160		30		172			
	朝鮮人	20								110					
安東	中国人	250								499					
	日本人	27				13		151		36		140			
	朝鮮人	22				3		31		45		29			
間島	中国人	60	34.3			3	5.3			399	34.6				
	日本人	45	25.7			25	43.9	134	99.3	141	12.2	184	53.3		
	朝鮮人	70	40.0			29	50.9	1	0.7	614	53.2	161	46.7		
	合計	175	100			57	100	135	100	1154	100	345	100		
三江	中国人	227				3				971		6			
	日本人	51				46		253		115		337			
	朝鮮人	43				7		9		234		41			

【表 5】1940 年末 満洲国の省（特別市）別・民族別の性売買業状況（前頁からの続き）

		料理店		料亭		カフェ		芸妓		酌婦		女給		ダンサー	
		数	比率	数	比率	数	比率	数	比率	数	比率	数	比率	数	比率
通化	中国人	106								253					
	日本人	26				13		134		42		140			
	朝鮮人	26				7		20		103		54			
牡丹江	中国人	203	57.3			2	1.7	3	0.6	796	52.7	22	2.3		
	日本人	90	25.4	3	100	95	81.2	419	87.3	287	19.0	759	79.4		
	朝鮮人	61	17.2			18	15.4	58	12.1	428	28.3	169	17.7		
	合計	354	100	3	100	117	100	480	100	1511	100	956	100		
東安	中国人	93								250					
	日本人	47				51		155		148		399			
	朝鮮人	29				3						6			
北安	中国人	395						10		1440					
	日本人	27				20		102		114		165			
	朝鮮人	25						4		140					
黒河	中国人	160								778					
	日本人	22				18		129		62		160			
	朝鮮人	16								120					
興安東	中国人	64								180					
	日本人	5				3		40		8		18			
	朝鮮人	3								9					
興安南	中国人	59								254					
	日本人	4				6		22		9		55			
	朝鮮人	2								10					
興安西	中国人	16						90							
	日本人	3				3		12		2					
	朝鮮人					1				2					
興安北	中国人	110				4				627		6			
	日本人	24				25		133		38		174			
	朝鮮人	11								68					

出典：満洲國治安部警務司『第四回警察統計年報』1942、230-232 頁。

注 1：原文では、中国人は満漢系、日本人は日系、朝鮮人は鮮系となっている。

注 2：上記以外に舞踏教師として、日本人 8 人・朝鮮人 1 人・その他 1 人がいた\*。

(\* 舞踏場は中国人 1 人・日本人 10 人・その他 1 人、興行場は中国人 139 人・日本人 71 人・朝鮮人 5 人・その他 5 人、遊技場は中国人 182 人・日本人 321 人・朝鮮人 48 人・その他 7 人となっている。)

全国的に日本人性売買業が料理店と酌婦を除いたすべての分野で最も高い割合を占め、料理店と酌婦の割合も人口比率より高かった。朝鮮人は料理店、カフェ、酌婦、女給の割合が人口比率を上回った。

各分野別に朝鮮人性売買業状況を見ると、次の点を指摘できる。①朝鮮人料理店は、興

安西省を除くすべての地域に存在した。おおむね人口比率に従って分布し、間島省、奉天省、牡丹江省、吉林省の順で多かった（民族別比率では間島省、牡丹江省、通化省、三江省、錦州省、吉林省の順で高かった）。辺境の三江省にも朝鮮人料理店が 43 カ所もあった。朝鮮人芸妓は牡丹江省、安東省、通化省、三江省、

浜江省、間島省にいた。牡丹江省に最も多かったのは、牡丹江市に朝鮮人券番があったためである<sup>41</sup>。

②朝鮮人の酌婦は、東安省を除くすべての地域に存在した。朝鮮人酌婦は奉天省、間島省、牡丹江省、吉林省、浜江省、新京特別市、三江省の順で多かった（民族別比率では間島省、牡丹江省、通化省、三江省、吉林省、新京特別市の順で高かった）。

③朝鮮人が経営するカフェは、間島省、（龍江省）、奉天省、牡丹江省、吉林省、三江省、通化省、新京特別市、濱江省、安東省の順で多く、朝鮮人女給は牡丹江省、間島省、奉天省、新京特別市、通化省、濱江省、三江省の順で多かった（比率では間島、吉林、牡丹江、新京、奉天、濱江の順だった）。龍岡省の場合、カフェが28軒で、女給が3人だが、これは誤記でなければ、朝鮮人女給が日本人のカフェに雇用されたものとみられる。しかし日本人の経営するカフェがしない一方、〔日本人〕女給が381人いるとされているのは理解しがたく、おそらく誤記だろうと思われる。東安省は朝鮮人カフェがなく、6人の女給だけがあり、興安西省は朝鮮人のカフェが1軒のみあるが女給はいない。誤記でなければ、東安省の朝鮮人女給は日本人カフェに雇用され、興安西省の朝鮮人カフェは日本人または中国人女給を雇用したと考えられる。しかし、朝鮮人女給が日本人カフェに雇用されることは可能だったが、朝鮮人カフェに日本人または中国人女給を雇用したとは思えない。

④朝鮮人ダンサーは、濱江（ハルビン）、吉林、新京、奉天の順で多かった。朝鮮人ダンサーの合計（28人）と実際の合計（40人）が合致しない。合計か、吉林省の朝鮮人ダンサー12人のどちらかが誤記だと思われる。

朝鮮人性売買業をみると、熱河省、錦州省、北安省（芸妓4人）、黒河省、興安東省、興安南省、興安西省、興安北省には料理店と酌婦のみだった（北安省には芸妓が4人以上おり、興安西省にはカフェが1つ以上あった）。龍江省にカフェがないことと、興安西省に女給がいなかったことを誤記だとすれば、日本人はすべての地域に料理店、芸妓、酌婦、カフェ、女給が存在した。

料理店とカフェの所在地は、市や県城、または駅がある街などである。1938年末当時、朝鮮人の都会における人口比率は10万人以上の大都市で3.0%、3万～10万人の中小都市で2.9%、1万～3万人の大市街で5.1%、5,000～1万人の中市街で5.0%、5,000人以下の小市街で3.7%にすぎなかったが<sup>42</sup>、性売買業の比率がすべて都会における人口比率を上回ったのは、朝鮮人性売買業が朝鮮人以外にも対象にしていたために可能であった（後述）。一方、日本人は大都市に71.7%、中小都市に13.9%が集中している。小市街でも行政の上層には必ず日本人がいたため、性売買業が営業をする都会には日本人の性購買者〔買春者〕が広がっていた。

日本人性売買業の割合は、性売買業内での職種の位階を反映するものであり、これは日本人性売買業が相手にする顧客である日本人が満洲国の「一等国民」であったためだった。朝鮮人性売買業も、朝鮮人だけでなく日本人の客を迎えたが、彼らはほぼ下層の日本人だった。中国人性売買業は、中国人だけでなく日本人と朝鮮人の客を迎えたが<sup>43</sup>、これらの日本人の多くは朝鮮人性売買業の客よりもさらに下層であり、朝鮮人も朝鮮人性売買業の客よりも下層だった。このように、性売買業の民族的な位階は、まさしく満洲国の民族的位階を反

<sup>41</sup> 牡丹江朝鮮人券番には45人の妓生がいた（『満鮮日報』1940年3月27日付、3面）。これらは、記者倶楽部の後援で1940年8月9日と10日の2日間、仮設劇場で、創立記念公演を行った（『満鮮日報』1940年8月9日付、5面）。

<sup>42</sup> 宮川善造『人口統計に見る満洲国の縁族複合状態』（満洲事情案内所、1941）、133頁。

<sup>43</sup> 黒竜江省虎林鎮の「紅宝堂」という妓院の例を見ると、中国人、日本人、朝鮮人すべてを受け入れている。姜紅喜「往事不堪回首」、文芳主編、前掲書、473頁。



映していたのである。

#### 4. 満洲国の朝鮮人「妓女」

次に、「妓女」として把握されている朝鮮人性売買従事者の統計をみてみよう。1934年8月末の奉天の妓楼所在地をみると、朝鮮人妓楼は西塔大街と十間房（新歓楽街を含む）にあり<sup>44</sup>、日本人の妓楼は西塔大街に接する日吉町と柳町に位置しており、中国人の遊廓は藤浪町、青葉町の集娼街（平康里）<sup>45</sup>、南市場、

北市場、工業区などに分散されていた<sup>46</sup>。そして妓楼の名称を見ると、朝鮮人妓楼は「楼」と「館」を使い、「金泉館」、「東海楼」のように妓楼や料理店のどちらにも使われている例もあった<sup>47</sup>。一方、中国人の集娼街にある中国人妓楼はすべて「書館」という名称を用いていた<sup>48</sup>。

このような妓楼の名称の民族別の違いは、ハルビンでも確認できる。ハルビンの民族別の妓館の分布は、表6の通りである。

【表6】ハルビンにおける民族別妓楼数（1933年6月時点）

	妓楼名	芸妓数	酌婦数	所在地
日本料理店	武蔵野	22		道裡地段街
	矢倉	14		道裡透籠街
	大吉	14		道裡田地街
	合 計	50		
日本妓楼	永楽	27		道裡一面街
	寿楼	17	14	
	新福楼	26		
	七福	20	3	
	大黒	11		
	朝日楼	35	10	
	玉屋	17	15	
	春日楼	14		
	婦歌川	12	6	
	酔月	11		
	本進楼	13	10	
	合 計	213	58	
朝鮮妓館	芳仙閣		8	道裡一面街
	芙蓉楼		12	
	芳月楼		11	
	哈爾濱館		10	
	東洋館		8	
	雲山楼		11	
	平安館		9	

<sup>44</sup> これらは朝鮮人密集地域だった。十間房は西塔大街と東加茂町の北端が会う東側一帯であった。新歓楽街は十間房の南側一帯に1933年に市街地を造成し、ダンスホール、カフェ、料理店などが入って十間房と呼応する歓楽街を成した。菊池秋四郎、前掲書、132頁。

<sup>45</sup> 平康里という名称は、その由来は分からないが、集娼街を表す名称と見られる。新京の平康里はバー、カフェ、喫茶店の密集地帯である吉野町付近にあった。

<sup>46</sup> 菊池秋四郎、前掲書、153頁。

<sup>47</sup> 朝鮮人料理店を見ると、西塔大街（7軒）、十間房（10軒）、大西関（1軒）所在の料理店18軒の中で、2つを除きすべて館（9軒）か、楼（7軒）という名称を使用していた（菊池秋四郎、前掲書、164頁）。

<sup>48</sup> 日本人たちもここに頻繁に出入りしたという（菊池秋四郎、前掲書、154頁）。

【表 6】ハルビンにおける民族別妓楼数（1933年6月時点）（前頁の続き）

	妓楼名	芸妓数	酌婦数	所在地
朝鮮妓館 (続き)	濱江館		10	道裡一面街
	福德楼		11	道裡買売街
	太平館		11	
	大成館		6	道外三道街
	松江館		5	道外昌平街
	合 計		120	
平康里	徳鳳下處		20	道外十六道街新世界南路
	群仙書館		20	道外十六道街平康里
	迎春院		20	
	九順下處		20	
	栄陞書館		20	
	双玉班		15	
	四喜班		10	
	蓮香班		10	
	侍僊班		15	
	桃源書館		10	
	天宝堂		20	
	桂宝堂		20	
	玉福堂		10	
	福楽堂		10	
	玉鳳堂		10	
	金楽堂		10	
	麗楽堂		10	
	永楽堂		10	
	合 計		260	

出典：菊池秋四郎『哈爾濱と奉天（哈爾濱の部）』（満洲視察東道社、1934）68-69頁。

妓楼の種類をみると、日本人のみで料理店と妓楼を区分し、朝鮮人は妓館、中国人は遊廓と表示した。まず、名称をみると、日本人料理店は特別な名称がなく、日本人妓楼は11軒のうち5軒だけで「楼」という名称を使った。日本人妓楼の名称はわかりづらく、妓楼のなかに料理店のような芸妓しかいない店が11軒のうち4軒もあることは、料理店と妓楼の区分があいまいだったことを示唆する。朝鮮人妓館は、奉天と同じく「館（7軒）」と、「楼（4軒）」という名称を使っている。中国人妓楼18軒は、

「下處（2軒）」、「書館（3軒）」、「班（4軒）」、「堂（8軒）」の名称を使っている。中国人妓楼の名称は等級を表した。上記の表の注記から桃園書館までを「二等妓楼」と表示し、「堂」の名称を持った妓楼は「三等妓楼」だったことがわかる。ところが、前述した奉天で中国人妓楼は書館と呼ばれ、日本人、朝鮮人、中国人妓楼が集まる新京の三笠町一帯にある中国人高等妓楼（原文は藝妓屋）の名称が、一流は書館または下處、二流は班、三流（娼館）は堂であることから<sup>49</sup>、満洲の中国人妓楼の等

<sup>49</sup> 川村湊『満洲鉄道まぼろし旅行』（文芸春秋、1998）、176頁。1934年12月末、首都警察庁の営業者調査を見ると125の妓館があった。渡邊巖「國都の營業形態」『満洲統計』第12號（1935）、27-29頁。

## 民族、地域、セクシュアリティ

級を定める名称が同じであり、統計に登場する妓楼はすべて高等妓楼であったことがわかる<sup>50</sup>。

次に、売買業者の規模を見ると、日本料理店は芸妓が平均17人、日本人妓楼は酌婦が平均10人、芸妓が平均9.7人（芸妓がいるところのみ）、朝鮮妓館は酌婦が平均10人、中国妓楼は酌婦が平均14人だった。中国妓楼の場合は酌婦の数が10人（9軒）、15人（2軒）、20人（7軒）の三種類があった<sup>51</sup>。

最後に、地理的分布を見ると、日本料理店と妓楼はすべて道裡（中東鉄道附属地）にあり、朝鮮人妓館は道裡（10軒）と道外（2軒）にあり、中国人妓楼はすべて道外（中東鉄道附属地の外の溥家甸）にあった<sup>52</sup>。そして日本人妓楼はすべて鉄道沿い（道裡一面街）に、

朝鮮人妓館はほとんどが道裡一面街（8軒）に<sup>53</sup>、そして中国人妓楼は一ヶ所を除いてはすべて道外十六路街の集娼街にあった。これを見ると、ハルビンでは、新京とは違って、民族別に集娼街が分離していたことがわかる<sup>54</sup>。このような民族別の集娼街の存在は、1934年12月1日に実施したハルビン特別市戸口調査でも確認できる。

ハルビンの妓館は、傳家甸（道外）と埠頭区（道裡）の2つの区に集中しており、中国人妓館は傳家甸に、日本人妓館と朝鮮人妓館は埠頭区に集中している<sup>55</sup>。これは表6と一致する。

満洲国の国勢調査では、妓館業の女子従事者の代わりに「妓女」という名称が使われた<sup>56</sup>。1935年の第一次臨時国勢調査における

【表7】ハルビン特別市の民族別妓館業女性従業者数（1934年12月1日時点）

	女性合計		中国人女性		日本人女性		朝鮮人、その他女性	
	総人口	妓館業従事者	総人口	妓館業従事者	総人口	妓館業従事者	総人口	妓館業従事者
全市	173,716	2,533	133,099	1,913	6,936	439	2,706	171
傳家甸	49,829	1,900	48,815	1,883	185		744	
埠頭区	21,372	623	8,944	6	4,910	392	764	166

出典：ハル濱特別市公署『ハル濱特別市戸口調査結果標第二巻第二輯（職業）』（1935）。

注：中国人は原文では本国人となっている\*。

(\* 本国人には漢族、満洲族、帰化人その他を含む。朝鮮人その他には台湾人を含むが、無視してもいい。日本人を内地人と朝鮮人その他に区分したのだ。これ以外にソ連人、無国籍、その他の外国人がいる。)

<sup>50</sup> 北京、上海、天津などでの妓楼の等級名称はすべて異なっていた。天津の例を見ると、1938年に妓楼組合である樂戸公會が成立して妓院を財産、妓女の数、経営の場所などを指標として五つの等級に分け、一〜二等妓院は班または書寓、3等妓院は堂または下處、四〜五等妓院は窟という名称を使用した。江沛「20世紀上半葉天津娼業結構述論」『中国近代史研究』第2号（2003）、157-159頁。

<sup>51</sup> ところが満洲国の時期、黒竜江省巴彥縣城の妓館を見ると、関帝廟付近の妓楼路地に30戸余りの妓館があったが、最大の妓館は妓女が3〜4人で、最も少ないところは妓女が1人だけであった（魏長海「一個妓女眼中的窟子胡同」、文芳主編、前掲書、427頁）。これを見ると、小都市に行くほど妓館の規模が小さかったことがわかる。

<sup>52</sup> 道裡と道外などと呼ばれるハルビンの地理的配置については金晃一・尹輝鐸・李東振・任城模『東アジアの民族離散と都市』（歴史批評社、2003）、289-291頁を参照せよ。

<sup>53</sup> 当時、道裡田地街には朝鮮人カフェの銀世界、朝鮮甲種料理海新館があり、買売街には朝鮮甲種料理（美技奉仕）、北一館（新喜樂の前身にあたる）があった。『満鮮日報』1940年2月8日、1940年9月25日、1940年6月21日。

<sup>54</sup> 1920年代にロシア妓楼（娼窟）はいくつもの道裡に20軒余り散在していた。上等の妓楼は斜紋街、地段街などにあり、最下等の妓楼は石頭道街と買売街に6〜7軒あった。劉靜嚴『浜江尘器録：外國娼窟』（1999、262頁（石方・劉爽・高凌『ハル濱俄僑史』（黒龍江人民出版社、2003）、569頁から再引用）。1940年代初めに吉林市では妓女がいる酒場（原文は酒館）が13軒あった。そのうち名称が確認される6軒（名月館、花月館、アリラン館、新京園、大成館、義喜館）のうち3つが一地域（福興里）にあった。吉林市民族事務委員會『吉林市朝鮮族志』、27頁。

<sup>55</sup> 埠頭区の次は太平区に日本人性売買業従事者が25人、朝鮮人性売買業従事者が5人いる。

<sup>56</sup> この職業分類は日本の現在の職業分類（1930年12月27日内閣訓令第3号）を翻訳して使用している。ところが、日本の職業分類式では中分類（24番）接客業（原文は待客業）従事者の下の小分類（186番）に芸妓と芸者が含まれているが、これが満洲国職業分類の式では妓女と翻訳されている。ここからは、日本の公娼制での芸妓と娼妓が、満洲国では芸妓に分類されていたことが分かる。接客業従事者の小分類にはまた、料理店、飲食店、機関などのオーナー（184番）、旅館、下宿、料理店、飲食店、機関などの使用人（187番）などがあった。「満洲職業分類式」『満洲統計』1-10



【表 8】満洲国の大都市で民族別の妓女の分布（1935年10月1日時点）

	合計			中国人			日本人			朝鮮人		
	女性	妓女	比率	女性	妓女	比率	女性	妓女	比率	女性	妓女	比率
新京	92901	1238	1.3	81168	1011	1.2	9889 (10.6)	323 (26.1)	3.3	1547 (1.7)	4 (0.3)	0.3
ハル ビン	166593	1941	1.2	131091	1303	1.0	10540 (6.3)	397 (20.5)	3.8	2714 (1.6)	166 (8.6)	6.1
奉天	163173	2334	1.4	154610	1982	1.3	3862 (2.4)	143 (6.1)	3.7	4304 (2.6)	209 (9.0)	4.9

出典：國務院總務廳統計處、『康德七年壬時國勢調査報告・都邑編第一卷新京特別市』、1938、24頁、50頁；『国康德七年壬時國勢調査報告・都邑編第二卷哈爾濱特別市』、1938、86-87頁、218-219頁；『康德七年壬時國勢調査報告・都邑編第三卷』、1938、46頁、170-171頁。

注：カッコ内は比率である。

新京特別市、ハルビン特別市、奉天市での妓女の分布は表8のようになる。

治外法権の撤廃以前のため、新京特別市と奉天市からは満鉄附属地が除外されている。ハルビンや奉天の場合、朝鮮人の妓女は全体の朝鮮人女性のうち、それぞれ6.1%、4.9%を占め、その割合が民族別で最も高かった。日本人妓女についても、三都市すべてで、妓女の比率が女性人口の比率を上回った。

次に、新京、ハルビン、奉天に次ぐ大都市に属し、満洲国の大都市のなかで日本人と朝鮮人の割合が最も高かった牡丹江市における民族別妓館の分布を見ると、次の通りだった<sup>57</sup>。①吉安里：各種の堂、楼の名称で妓館が60軒余り、妓女100人余りがいた。②永春里：

妓女が200人余りいた。③安福里：妓女が数十人いた。これら3つの地域の妓館すべてが三等妓館であり、妓女にはどんな文化の素養もなかった。④秦樓書館：比較的高級の三等妓館だった。妓女は20人余りいたが、いずれもきれいで、教養があり、歌舞に長けていた。一方、日本人と朝鮮人が経営する機関は七星街、昌徳街、圓明街一帯にあり、妓女は合計200人余りいた。このように牡丹江市の妓館も、ハルビンの場合と同様に、中国人妓館と日本人・朝鮮人妓館に分かれていたことがわかる。

最後に、小都市（原文は都邑）での民族別妓女の分布を見てみよう。第二次臨時人口調査で確認できる53の小都市での民族別の妓女の分布は、表9の通りである。

【表 9】一部の小都市における妓女の民族別分布（1936年12月末時点）

都市名	人口	中国人	日本人	朝鮮人	都市名	人口	中国人	日本人	朝鮮人	都市名	人口	中国人	日本人	朝鮮人
額穆	総数	5997	137	804	依蘭	総数	11795	82	172	西安	総数	15155	516	103
	妓女	85	11	30		妓女	91	1	2		妓女	200	31	16
敦化	総数	12748	626	773	呼蘭	総数	22483	54	42	東豊	総数	8861	28	10
	妓女	81	51	9		妓女	--	--	--		妓女	--	--	--
樺甸	総数	9340	5	2	阿城	総数	16291	52	349	海龍	総数	8898	15	346
	妓女	38	--	--		妓女	49	--	--		妓女	25		3
磐石	総数	9577	142	650	雙城	総数	26339	103	86	山城鎮	総数	14785	299	1056
	妓女	39	3	7		妓女	111	1	1		妓女	66	28	3
九台	総数	5093	43	75	海倫	総数	16497	212	113	北鎮	総数	12979	11	19
	妓女	68	--	--		妓女	122	24	7		妓女	25	--	--

（満洲統計協會、1935）、6頁。

<sup>57</sup> これは1943年に姑によって800円で牡丹江市永春里のある妓館（窟子）に売られていった一人の妓女出身の回顧だ。程惠蘭「婦女涙」、文芳主編、前掲書、457-458頁。

【表 9】一部の小都市における妓女の民族別分布（1936年12月末時点）（前頁の続き）

都市名	人口	中国人	日本人	朝鮮人	都市名	人口	中国人	日本人	朝鮮人	都市名	人口	中国人	日本人	朝鮮人
扶餘	総数	26097	23	28	綏化	総数	15680	226	86	黒山	総数	10394	16	6
	妓女	22	5	--		妓女	147	31	--		妓女	21	--	--
農安	総数	11012	61	17	巴彦	総数	14175	22	26	義	総数	10466	68	20
	妓女	47	3	--		妓女	40	--	--		妓女	61	10	--
榆樹	総数	5897	10	23	一面坡	総数	9745	366	232	赤峯	総数	16614	463	28
	妓女	30	--	--		妓女	25	29	--		妓女	92	42	6
訥河	総数	4996	90	59	寧安	総数	11336	161	415	平泉	総数	12845	163	14
	妓女	138	--	--		妓女	--	--	2		妓女	31	--	5
龍鎮	総数	3820	558	45	牡丹江	総数	7097	3206	3357	王爺廟	総数	3420	235	216
	妓女	105	48	10		妓女	306	194	65		妓女	40	19	4
克山	総数	10728	169	21	綏芬河	総数	1867	626	250	通遼	総数	17656	297	256
	妓女	180	20	--		妓女	33	54	34		妓女	192	29	10
拜泉	総数	11819	26	19	圖們	総数	1024	1411	8454	開魯	総数	11982	46	27
	妓女	152	--	--		妓女	31	75	102		妓女	43	--	--
泰來	総数	6833	53	52	龍井	総数	1650	674	8659	林西	総数	3989	50	22
	妓女	57	5	4		妓女	24	43	60		妓女	19	3	8
大賚	総数	14130	22	3	琿春	総数	3177	482	3035	海拉爾	総数	3139	1617	57
	妓女	62	--	--		妓女	33	33	15		妓女	323	110	9
洮安	総数	7648	766	145	新民	総数	15918	78	20	滿洲里	総数	1278	467	38
	妓女	63	55	10		妓女	27	1	--		妓女	75	61	6
洮南	総数	20441	340	236	法庫	総数	10409	33	6	札蘭屯	総数	2294	158	26
	妓女	186	16	8		妓女	40	--	--		妓女	27	17	5
開通	総数	6337	33	12	遼源	総数	13463	352	89	博克圖	総数	1392	320	39
	妓女	47	--	--		妓女	60	19	3		妓女	69	31	6
富錦	総数	11861	145	51	西豊	総数	12982	63	99					
	妓女	319	23	--		妓女	56	--	--					
合 計	人口	中国人		日本人		朝鮮人								
	総数	552,449		16,221		30,788								
	妓女	4,223		1,126		450								

出典：國務院總務廳統計處、『第二次臨時人口調査報告書總括篇（前半・後半）』、『外地國勢調査報告、第二集：滿洲國國務院國勢調査報告第五冊』（発行年度不明）。

注：人口数はいずれも女性人口である。

上記の表に現れた一部の小都市での女性人口に占める妓女の割合を見ると、日本人（6.94%）、朝鮮（1.46%）、中国人（0.76%）の順で日本人の妓女が最も多かった。ところが、この一部の小都市の人口に対する妓女の割合をハルビンなどの大都市と比べると、日本人は小都市の方が高く、朝鮮人と中国人は大都市がより高くなる傾向が表れた（朝鮮人は新京

を除く）。これは日本人の場合もともと大都会への集中率が高く、小都市では相対的に上位層により集中していたからであろう。

妓女の分布を最大値で比較してみよう。中国人妓女は海拉爾、富錦、牡丹江、西安、洮南、克山、拜泉、綏化、訥河の順で多く、日本人妓女は牡丹江、海拉爾、圖們、滿洲里、洮安、綏芬河、龍鎮、龍井、赤峯の順で多く、朝鮮

人妓女は圖們、龍井、牡丹江、綏芬河、額穆、西安、琿春、龍鎮、洮安の順に多かった。したがって、各民族別の妓女の数が多い9つの市街地のなかで、朝鮮人の妓女と中国人の妓女が多い都市は1つ（牡丹江）のみが重複するだけだが、朝鮮人と日本人の妓女については5つの市で重複する。そして日本人の妓女と中国人の妓女は2つの市が合致する。したがって、妓女の数分布をみると、朝鮮人妓女は中国人妓女よりも日本人妓女のいる地域により多く集まったことがわかる。小都市のなかでは龍鎮、赤峯、平泉、林西、海拉爾、満洲里<sup>58</sup>、札蘭屯、博克圖などは、朝鮮人女性のなかでの妓女の比率が特に高い地域だった。

## 5. 満洲国性売買従事者の民族間、民族内の位階

性売買制度を通じて、性売買従事者の位階を確認できる。これは民族間位階と民族内位階に分けて見ることができよう。ここでは民族

間の位階について検討する。これについては、断片的な資料しか確認できない。まず、朝鮮人性売買業のなかで最も発達していた料理店について見てみよう。1930年代前半の新京の料理店業における民族別の営業状況は、表10の通りだ。

料理店の数を人口に対比してみると、朝鮮人料理店が最も多かったが、平均売上高は最も低かった。つまり、朝鮮人料理店は数が多いかわりに規模が零細だったことがわかる。ところが、中国人の料理店は実は「妓館」だった。料理店と比せられる妓館は高等妓館であり、そのため中国人料理店の売り上げが高いことがわかった。一方、朝鮮人料理店の場合、名称は料理店だが、娼妓を雇ったケースもあり、これによって公式の売上高が低く表れたとみられる。そうでないなら、人口に対する料理店の割合は説明しがたい。

料理店の売上額には、芸妓花代、酌婦花代、酒代が含まれていた。1940年7月中に奉天

【表10】新京の料理店業の営業状況

年度		朝鮮人		日本人		中国人	合計
		満鉄附属地	特別市	満鉄附属地	特別市	満鉄附属地	特別市
1931	数	6	--	19	--	33	58
	売上高	22,791	--	450,504	--	130,502	603,799
	平均売上高	3,799	--	23,711	--	3,955	10,410
1932	数	13	--	29	--	33	75
	売上高	68,599	--	1,500,573	--	591,937	1,961,109
	平均売上高	5,277	--	51,743	--	17,937	26,148
1933	数	20	3	36	33	33	89
	売上高	136,336	6,000	1,904,981	554,000	552,830	2,594,147
	平均売上高	6,817	2,000	52,916	16,788	16,752	29,148
1934	数	20	3	44	33	36	100
	売上高	114,000	11,000	733,000	711,000	574,000	1,420,000
	平均売上高	5,700	3,666	16,659	21,545	15,944	14,200

出典：新京地方事務所勤業係、『新京發展事情概況』（1934）；新京地方事務所勤業係、『新京の現況』（1935）、8頁より作成。

<sup>58</sup> 1927年7月、欧米旅行に出発した羅蕙錫はシベリア鉄道の本線との連結地であるこの地に到着し、朝鮮人「密売淫女」を目撃した。この事実を彼女は5年後に次のように短く書いた。「夜8時にロシアと中国の国境である満洲里に到着した。一時間の間市街を見物した。国境だけあって軍営が多く、小さな市街地でも朝鮮人密売淫女まで備えている（原文通り）。」羅蕙錫「ソビエト露西亞行：歐米遊記その一」『三千里』12月号（1932）、660-663頁。1927年当時の満洲里の朝鮮女性人口と性売買従事者の数は確認できないが、1940年当時でも朝鮮人、性売買従事者を容易に目にすることができた。満洲里の朝鮮人女性39人（全女性人口は1,800人）のうち、性売買従事者が6人もいたためだ。〔訳注：羅蕙錫は朝鮮初の女性西洋画家であり、文筆家として、植民地期朝鮮を代表する「新女性」の1人。〕



【表 11】牡丹江市の性売買業の民族別営業状況（1940年6月末）

	芸妓			酌婦			女給			合計	
	数	収入	平均収入	数	収入	平均収入	数	カフェ収入 (酒代)	平均収入	数	収入
中国人				468	31,784	68					
日本人	266	89,656	337	161	43,055	267	25	101,730		443	410,156
朝鮮人							568	28,504			
合計										1,475	470,444

出典：『満鮮日報』1940年7月28日付、5面。

注：中国人の酌婦は原文では芸酌婦（芸妓と酌婦の合計）である。

市大和の警察署管内（旧満鉄附属地）の料理店の売上高（原文は遊興額）内訳を見ると、全体の売上高は72万圓〔満洲国圓。以下、圓〕で、そのなかで芸妓花代が29万4千圓、酌婦側が13万5千圓、酒代が29万6千圓だったという<sup>59</sup>。1941年末の大和の警察署管内の芸妓（544人）と酌婦（810人）の数から推定すると<sup>60</sup>、芸妓の平均収入は540圓、酌婦の平均収入は167圓だった。したがって、日本人料理店の売上高が高かったのは、日本人芸妓の花代収入が大きかったと思われる。

芸妓、酌婦だけでなく、女給を含む営業状況を見てみよう。1940年6月末当時の牡丹江市における中国人、日本人および朝鮮人による性売買業の営業状況は、表11の通りだ。

この統計には、日本人収入合計には料理店の酒代87,857圓が含まれている。中国人の場合は酒代収入が確認できないため、収入合計が計算できない。日本人の芸妓と酌婦の花代を比較するとあまり差が出ない反面、日本人の酌婦と中国人の酌婦（実際は妓女）は花代で大きな差が出た。この統計は、牡丹江市が「北辺振興計画」による新生都市であり、満洲国の大都市のうち日本人と朝鮮人の割合がいずれも最も高い都市であったことから特殊なケースだと言えるが、性売買従事者の民族内（職種間）差別より民族間（職種内）差別の

方が大きかったことを示唆する。上記の統計では、残念ながら朝鮮人酌婦の収入を確認することができない。

上記の統計では、女給の収入（チップ）は確認できない。カフェの収入は酒代を表すが、これを女給の数で割ると、日本人女給の場合は一月に平均4,069圓の売上を上げている一方、朝鮮人女給の場合は一月に平均わずか50圓の売上しかない。上記の記事で、もともと朝鮮人女給は6,143人になっていた。合計と日本人、中国人の性売買従事者の数を差し引いて朝鮮人女給の数を求めたものだが、朝鮮人女給の数と日本人女給の数を比べてみると誤記だとわかる。表5で、牡丹江市を含む牡丹江省の日本人女給が759人で、朝鮮人女給が169人だったのと比較してもわかる。あるいは、酌婦と女給を合わせた数だった可能性もある<sup>61</sup>。

民族別の性売買従事者の収入を比較できる一つの資料がある。人口が12万人で牡丹江市よりやや少なく、牡丹江市に近く、また新生都市でもあった佳木斯市（三江省）〔現・黒竜江省ジャムス市〕の酌婦（妓女）の民族別料金収入を見ると、表12の通りである。

この統計を見ると、1ヵ月間の民族別酌婦の平均花代収入は、日本人、中国人、朝鮮人の順だった。ところが、先に見た奉天市、牡

<sup>59</sup> 『満鮮日報』1940年9月1日付、4面。

<sup>60</sup> 奉天市公署・奉天市商工公會、前掲書、20頁。

<sup>61</sup> 牡丹江市は「朝鮮人が4万名を突破したが、あるのは人と酒店（料理店とカフェ）だけ」と言われるほど朝鮮人性売買業が盛況だった。『満鮮日報』1940年7月28日付、5面；『満鮮日報』1940年9月4日付、5面。

【表 12】佳木斯市における民族別酌婦の花代収入の比較

	日本人	朝鮮人	中国人
酌婦数	158	115	326
花代収入	60,000 圓	30,000 圓	100,000 圓
平均花代収入	380	261	307

出典：『満鮮日報』1940年9月21日、4面。

【表 13】1939 年のハルビン市における性売買従事者（芸妓・酌婦）性病の現況

	検診回数	受診人員	罹病率
中国人	2	1,363	14.8
朝鮮人	4	605	2.48
ロシア人	4	225	5.34
合 計	10	2,193	10.39

出典：哈爾濱市公署、中国哈爾濱市統計月報、1（1939）、11 頁。

注：診察を免除されたのは月経が223人、事故者が48人だった。

丹江市と違って、その差はそれほど大きくはない。なぜだろうか？ もちろん、地域によってある程度の偏差が存在していたのだろう。また、他の要因としては、新京満鉄附属地での例と同様、この統計でとられた中国人酌婦（実際は妓女）が高等妓女に限られたからであろう。これは、人口対酌婦の割合が中国人は非常に低く、日本人と朝鮮人、特に朝鮮人は非常に高いことから推測できる<sup>62</sup>。そして朝鮮人酌婦内でも収入での差が現れた。朝鮮人酌婦の平均収入が最も低かったが、一等を獲得した人は朝鮮人が経営する共楽館の笑子（エミコ）で月平均的花代収入が944圓に達した。

民族別性売買従事者の地位がわかる別の指標として性病の現況がある<sup>63</sup>。1939年のハルビ

ン市での性売買従事者の性病現況を見てみると、表13の通りである。

朝鮮人とロシア人は、中国人よりも検診を受けた。受診人員を回数で割ると、中国人は681.5人、朝鮮人は151.3人、ロシア人は56.3人だった。中国人は性病検診回数が最も少なく、罹病率が最も高かった<sup>64</sup>。罹病率を見ると、朝鮮人が最も低く、次がロシア人だった。ところが、1937年、ハルビンのロシア人妓女（原文は芸娼妓）の性病検診の成績（表14）と比較すれば、1939年にハルビンのロシア人妓女の性病罹病率がやや下がったことがわかる。罹病率を見ると、1937年に比べて、1939年にハルビンのロシア妓女の罹病率が下がったことがわかる<sup>65</sup>。

<sup>62</sup> 1943年末の佳木斯市の民族別人口分布を見ると、中国人（満漢族、蒙族、回族、その他を含む）が82,924人、日本人が16,222人、朝鮮人が5,626人だった。警務總局「主要都市・市街地戸口統計表」（出版年度不明）、65頁。1940年末、佳木斯市がある三江省での民族別の性売買従事者の割合を見ると、中国人酌婦が971人、日本人芸妓（253人）と酌婦（115人）を合わせて368人、朝鮮人芸妓（9人）と酌婦（234人）を合わせて243人だった（表5参照）。

<sup>63</sup> 満鉄附属地では芸妓と酌婦に対し性病検診を行っていたが、満洲国で全国的に性病検診を実施したのは、1938年9月民生部令で〈健康診断規制〉を公布したのが始まりだった。その後、芸妓や酌婦などの「売淫常習者」に対し定期的な健康診断を実施し、性病感染者は公立の婦人病院および性病診療所に強制的に収容して治療した。満洲國史編纂刊行會『満洲國史・各論』（謙光社、1973）、1198頁。

<sup>64</sup> 表8の中国人の妓女1,303人、朝鮮人の妓女166人という統計をみれば、中国人の妓女の検診回数が1回だった可能性も排除できない。

<sup>65</sup> 満洲国統計によると、1936年に哈爾濱通に税金を納付したロシア人妓女は72人（平均税金額288圓）だった。『哈爾濱特別市市勢統計月報』第1巻第10チーム（1936）；同書、569頁から再引用。上海でもロシア人妓女は、欧米（白人）の妓女の中で最も数が多く、地位が低かった。1930年代の観察者によると、上海ではロシア人妓女が8,000人に達し、その他の国籍の白人の妓女が2,000人に達した。ロシア人妓女はたいていハルビンから来た。Henry Champly, *The*

【表 14】1937 年のハルビンにおけるロシア妓女の性病検診の成績

月別	検査回数	受診者数	性病感染者数					
			梅毒	淋病	軟性下疳	その他	計	罹病率
1 月	4	230	7	11	1	--	19	8.26
2 月	4	238	3	20	3	--	23	9.66
3 月	4	193	--	19	--	--	19	9.84

出典：『哈爾濱特別市市勢統計月報』第1巻、第12號（1940）；石方・劉爽・高凌、『哈爾濱俄僑史』（黒龍江人民出版社、2003）、569頁より再引用。

一部の朝鮮人性売買従事者の収入を、1940年3月に『満鮮日報』の学芸部記者の満洲の五都市（ハルビン、新京、牡丹江、龍井、奉天）の朝鮮人職業女性に対する探訪記で見ると、同じ職種であっても地域（または個人）によって収入差が大きく表れた<sup>66</sup>。ダンサーは女給より収入が多いようだが、ハルビンのダンサー（300圓）や新京のダンサー（120～130圓）の間では収入の差が大きく、女給の中でも奉天（300圓）とハルビン（200～300圓）の女給と新京・龍井の女給（100圓）の間の収入差が大きかった。ダンサーの場合は、チケット（踊り票）を受け取ったがチケット単価が地域によって異なることがあり、女給はチップを収入にしたので（化粧品代として給料15圓を受け取るケースもあった）、人気によって収入が違ふのは当然だった。

しかし、同探訪記に出てくる性売買従事者たちは、他の職業女性と比べると高収入グループだった。他の職業女性の収入を見ると、新京の幼稚園保母は20圓、看護師2人はいずれも50～60圓、牡丹江省公署タイピストは60圓、新京協和会事務員は55圓（月給45圓、

手当て10圓）だった<sup>67</sup>。性売買従事者が性売買業に流入した理由も、こうした高い収入のためだった。ところが、探訪記に出てくる性売買従事者の支出を見ると、彼女たちを性売買業に導いた高い収入という誘惑の源は、実は自分のためというより家族のためというケースの方が多かったように見える<sup>68</sup>。

## 6. 結論

満洲国の朝鮮人性売買従事者は、日本人性売買制度に依って「芸妓（妓生）、酌婦、女給、ダンサー」などにも分類され、中国人性売買制度に依って「妓女」にも分類された。こうした事情は、日本人や中国人の場合も同様だった。二つの分類がともに可能だったのは、性売買従事者（「妓女」と呼ばれる）というセクシュアリティの同一性があったためだ。とはいえ、民族（朝鮮人、日本人、中国人）間、地域（朝鮮人の場合は朝鮮内と満洲、日本人の場合は日本内と満洲）間、そしてセクシュアリティ（日本人と朝鮮人の場合に芸妓、酌婦、女給、ダンサー、そして統計には出ていないが、娼妓、そして中国人の場合に各等級の妓女）間で差

*Road to Shanghai: White Slave Traffic in Asia*, Warre B.Wells, translated, London: John Long Ltd., 1934, pp.188-189；賀蕭、前掲書、51頁。

<sup>66</sup> 性売買従事者は、探訪記に登場する職業女性の中で最も高い割合を占めた。それ以外は小学校教諭、幼稚園保母、看護師、事務員（タイピスト）、電話交換手、美容師などがいた。満洲地域で朝鮮人の職業女性として最も多かったのは女給、女店員、女事務員だった。これは職業女性のうち酌婦を除外していることがわかる。実際、性売買従事者を職業女性と認めるかどうか議論になった時も、その性売買従事者とは妓生と女給だった。これについては「職業婦人座談会」『新女性』1933-4、51-54頁；姜貞姫「女給も職業婦人か」『新女性』1932-10、373頁；張英順「私が女給になるまで：この職業を蔑まないでください」『新女性』、1933-3、80-85頁などを参照せよ。

<sup>67</sup> 『満鮮日報』1940年3月9日、13日、14日、18日、各4面。

<sup>68</sup> 女給が200～300圓を受け取ったケースでは父親に100圓を送っており、ダンサーとして120～130圓を稼いだケースは、母子家庭の生活費と弟の学費を出していた。女給として100圓を受け取っているケースでは妹の学費を含めて家に50圓を送っており、女給として300圓を受け取っていたケースは、両親の生活費と4人の弟の学費を出しており、月収額不明の牡丹江市のある女給は兄の学費を出している。



異が現れた。この差異によって、民族、地域、セクシュアリティのアイデンティティが形成された。すなわち、朝鮮人性売買従事者は、民族、地域、セクシュアリティの交差の上に立っていた。

本稿では、満洲国の朝鮮人性売買従事者がどのようなルートを通じて性売買従事者となり、また彼女たちがその後どのような人生を生きたのかについては検討できなかった<sup>69</sup>。満洲国の朝鮮人性売買従事者たちは、ただ金を稼ぐために強要された人生を生きなければならなかった。彼女たちの運命を決定づけたのは性売買制度をつくった国家であり、この国家と共謀する「観念」であった。最後に、この観念を指摘したい（このような観念は現在では完全に消えたのだろうか?）。

この観念は、次のような言説に現われた。一つは李光洙〔近代朝鮮を代表する小説家〕の言説だ。当時、東亜日報編集局長だった李光洙は、1933年大連博覧会を機に開催された日本全国新聞協会大会に参加した後、満洲国の各都市を歴訪して帰国した後に、ある座談会で次のように話した<sup>70</sup>。「都会にいる人々の生業は、ほとんどが人肉商売と密輸入者で……。私はこの旅行で、朝鮮人の人肉市場に本当に驚きました。奉天、吉林、哈爾濱、新京など、いたるところに朝鮮人料理業者がいなくて、ないところはありません。料理業を開始さえすれば、成功するんだそうです。それは、中国の女は汚くて、だからみんな朝鮮女を歓迎するというが、そんなわけである女は1日に35人の男に接したそうです。それでお金が残らないことがありますか。奉天署には人肉商売をして20万圓のお金を集めた金持ちもいたり、他にも数百万圓、十数万圓ずつ集めた成功者がい

るそうです（原文通り）」。もう一人の大会参加者である金炯元（朝鮮日報編集局次長）も座談会で、次のように語った。「都会では娼妓業が全盛でした。奉天に朝鮮人が一万人余り住んでいるというのですが、朝鮮人料理屋が4、50軒あります。新京、吉林などにも、全部で10～20軒ずつあります。」

李光洙が性売買業を「人肉商売」と表現したのは、目新しいことではなかった。雑誌でこの用語がすでに使われていた。この言葉には性売買業に対する蔑視、ひいては性売買従事者に対する蔑視がこめられていた。李光洙や金炯元が発言で強調したのは、売春業が「金儲け」になることだった。彼らの言説には、朝鮮人性売買従事者が1日に35人の男を相手にしたことに対する同情は一切ない。強調されるのは、性売買業者の「成功」だけだった。

資本を持って満洲に来られなかった朝鮮人の事業の例は、比較的元手のかからない料理店業や阿片密売業に偏っており<sup>71</sup>、そのため満洲での朝鮮人の評判が悪くなったが、後に料理店業は朝鮮人の「成功事例」として称えられるまでになった。次の『満鮮日報』の記事がその例だ<sup>72</sup>。

米穀および穀物貿易商、金融業者、その他一般商業、飲食店、旅館などが、朝鮮農民と月給取りに向けて経営されてきた。ゴム、印刷など若干の業種を差し引いて、満洲朝鮮人の商工業は概ね朝鮮農民と下級月給取りによって維持されてきたと言える。ところが、このうち業種としてはたとえ自慢できるものではないとしても、その営業形態において、また営業成績で注目すべきは各地の料理業だ。満洲の主要都

<sup>69</sup> 一般的に性売買従事者は「道」の上の存在である。彼女たちはずっと「旅行」をしている。満洲国の朝鮮人性売買従事者の場合は朝鮮内地から来る場合が多く、日本人性売買従事者も日本内地から来た場合が多かった。朝鮮から満洲に来た朝鮮人性売買従事者の旅は続いた。

<sup>70</sup> 「在満同胞問題座談會」『三千里』9月号（1933）、49頁。

<sup>71</sup> 「朝鮮人は大企業を起こす力量がないので、結局満洲で商売をするのは色酒家という言葉と同義語になった」『満鮮日報』1940年9月29日付、3面。

<sup>72</sup> 『満鮮日報』1939年12月9日付、1面。

市に朝鮮人として経済力を握っているのが彼ら営業主たちだということで、彼らの営業成績はわかるが、これは彼らが発見した満洲の現地に適応した営業形態に期したものと考えられる。つまり、本来貧弱な朝鮮人の経済力だけに依拠せず、営業形態を超民族的に形成していくことで、営業が目標とする世界を拡大し、これによってその発展を期そうということである。こうした意味で、満洲主要都市の朝鮮人料理業はその営業形態において、満洲朝鮮人商工業者に大きな示唆を与えているだろう（原文通り）。

料理業で営業形態を「超民族的に」形成していくということは、朝鮮人の性売買従事者が日本人（下層）を顧客にするようになったことを意味する。そして、これが、朝鮮人性売買業が成功を収めた真の理由だった。このことは、朝鮮人商工業から「朝鮮人依存主義」から脱皮する一つの成功事例と見なされた。

しかし、朝鮮人性売買従事者にとって、日本人を顧客として迎えるというのは何を意味するものだったのか。朝鮮人性売買従事者たちは、日本語ができるほどの学歴を備えていない人たちだった。彼女たちが日本人を相手にするのは主に「娼妓」としてであり、朝鮮人料理店が成功したのもそのためだった。

性売買業が朝鮮の成功した商工業と称えられる反面、性売買従事者に対しては沈黙が守られた<sup>73</sup>。当時の新聞では、性売買従事者は尋ね人広告<sup>74</sup>、または店の広報用広告として登場

した。この場合、彼女たちの顔が新聞に載った<sup>75</sup>。このような性売買従事者の「他者化」こそ、彼女たちを「日本軍慰安婦」として強制的に連行するのに共謀したのではないだろうか？ もちろん公娼制や「日本軍慰安婦」の強制連行は国家の犯罪であるが、その国家と共謀した市民の犯罪でもあるのだ。公娼制における性売買従事者に対する人身拘束、そして雇い主と性売買従事者、顧客と性売買従事者間の不平等性を批判しないこと、性売買従事者の苦痛から目をそむけ、彼女たちを社会的に排除し、ひたすら業主の観点から「金儲け」の成功を称賛すること、そしてセクシュアリティの「植民地性（収奪性）」を批判しないことこそ、結局、性売買従事者たちを日本軍慰安婦にまで追いやったことに共謀してきたのではないだろうか？

たとえ性売買従事者が日本軍慰安婦にされたからといって、その犯罪性が弱まることはない。かといって、それが強制連行でないとか、人身拘禁でないとか、「暴力」でないわけではない。にもかかわらず、当時の性売買従事者たちは依然として沈黙を強いられている<sup>76</sup>。彼女たちが沈黙を破って自ら発言する時、言い換えれば、彼女たちが社会に参加するとき、はじめて「性搾取」制度としての性売買はなくなりうるだろう。

（監訳：金富子、翻訳：吉良佳奈江）

<sup>73</sup> ある研究者が前掲の報告にあるように羅蕙錫が満洲里で見た朝鮮人「密売淫女」に対する「沈黙」を指摘したように、こうした沈黙は当時も現われ、現在まで続いている。宋連玉「朝鮮「新女性」のナショナリズムとジェンダー」、ムン・オクピョほか『新女性』（チョンニョンサ、2003）、105頁。

<sup>74</sup> 逃げた酌婦を探す尋ね人広告の例としては、『満鮮日報』1940年7月29日付、4面；1940年9月4日付、2面などがある。

<sup>75</sup> 一例として、濱綏線綏陽駅の〔綏陽街にあった〕愛国樓の広報では、竹子、若子、マサオ、明花、君子、アサコという6人の写真を載せた。彼女たちは、朝鮮式と日本式が入り混じっただけでなく、服装も韓服、和服、洋装が混ざっており、それに合わせ髪型も違っていた。『満鮮日報』1940年6月1日付、8面。

<sup>76</sup> 中国では性売買業そのものについての証言（性売買従事者自身や直接見たり、直接見た人に聞いた人によってなされた）が出ている（文芳主編、前掲書）。しかしこれらの証言は性売買禁止主義という「新社会」の政策を正当化するため「旧社会」に対する告発という枠内で行われた。

## 【参考文献】

- 「在滿同胞問題座談會」『三千里』1933年9月号
- 김영일·윤휘탁·이동진·임성모, 『동아시아의 민족이산과 도시』. 서울: 역사비평사, 2003.  
(金旻一、尹輝鐸、李東振、任城模『東アジアの民族離散と都市』ソウル: 歴史批評社、2003)
- 김영신「일제하 한인의 대만이주」. 『국사관논총』 제 99 호, 2002. (김·윤신「日帝下韓人の台湾移住」『国史觀論叢』第99号、2002)
- 나혜석「쏘비엣露西亞行: 歐米遊記의 其一」. 『三千里』12 월호, 1932. (羅蕙錫「ソビエト露西亜行: 欧米遊記 その一」『三千里』12月号、1932)
- 滿鮮日報社《滿鮮日報》.
- 朴潤元「臺灣에서 生活하는 우리 兄弟의 狀況」. 『開闢』 제 13 호, 1921. (朴潤元、「台湾で生活するわれらが兄弟の状況」『開闢』第13号、1921)
- 배리 캐슬린 저, 정금나. 감은적 역, 『섹슈얼리티의 매춘화』. 서울: 삼인, 2002. (キャスリン・バリー著、チョン·금나、감은적 역, 『セクシュアリティの売春化』, ソウル, 삼인, 2002)
- 서지영「식민지 시대 카페여급연구: 여급잡지〈女聲〉을 중심으로」. 『한국여성학』 제 19 권 제 3 호, 2003. (서·지영「植民地時代カフェ女給研究; 女給雜誌〈女聲〉を中心に」『韓國女性學』第19卷、第3号、2003)
- 孫禎睦「日帝下の 賣春業: 公娼과 私娼」『都市行政研究』 제 3 호, 1988. (孫禎睦、「日帝下の賣春業: 公娼と私娼」. 『都市行政研究』第3号、1988.)
- 송연옥「대한제국기의〈기생단속령〉,〈창기단속령〉: 일제 식민화와 공창제 도입 준비과정」, 『한국사론』 제 40 호, 1998. (宋連玉、「大韓帝國期の〈妓生團束令〉、〈娼妓團束令〉: 日帝植民地と公娼制導入の準備過程」, 『韓國史論』第40号、1998.)
- 송연옥「조선 ‘신여성’의 내셔널리즘과 젠더」문옥표 외『신여성』서울: 청년사, 2003. (宋連玉「朝鮮‘新女性’のナショナルリズムとジェンダー」ムン·옥표他『新女性』ソウル: 青年社)
- 여성부『2002 년 국외거주 일본군 위안부 피해자 실태조사』. 서울: 여성부, 2002. (韓國政府女性部『2002年国外居住日本軍慰安婦の被害者実態調査』ソウル: 韓國政府女性部、2002.)
- 오영섭「초대대통령취임식 갖가운 비올빈」. 『三千里』9 월호, 1935. (오·영섭、「初代大統領就任式の近いフィリピン」『三千里』9月号、1935.)
- 윤휘탁「만주국의 ‘이등국(公)민」」『역사학보』 제 169 집, 2001. (윤·히탁「滿洲国の‘二等國(公)民」」, 『歷史學報』第169集、2001.)
- Garon, Sheldon, “The World’s Old Debate? Prostitution and the State in Imperial Japan, 1900-1945.” *American Historical Review*, 98-3(June). 1993.
- Hershatter, Gail. *Dangerous Pleasure: Prostitution and Modernity in Twentieth-Century Shanghai*. Berkeley: University of California Press. 1997.
- 江沛、「20 世紀上半葉天津娼業結構述論」, 『近代史研究』第2號、2003。
- 姜紅喜、「往事不堪回首」、文芳主編『娼禍』、中國文史出版社、2004。
- 警務總局、「主要都市・市街地戶口統計表」(出版年度不明)。
- 國務院總務廳統計處、『第二次臨時人口調查報告書 總括篇(前半・後半)』『外地國勢調查報告、第二集: 滿洲國國務院 國勢調查報告 第五冊』(出版年度不明)。
- 國務院總務廳統計處、『康德七年臨時國勢調查報告・都邑編第三卷』、1938。
- 國務院總務廳統計處、『康德七年臨時國勢調查報告・都邑編第二卷(哈爾濱特別市)』、1938。
- 國務院總務廳統計處、『康德七年臨時國勢調查報告・都邑編第一卷(新京特別市)』、1938。
- 吉林省民族事務委員會、『吉林市朝鮮族志』。
- 滿洲國治安部警務司、『第四回警察統計年報』、1942。



## 民族、地域、セクシュアリティ

- 文芳主編、『娼禍』、中國文史出版社、2004。
- 謝吾義、「民初上海娼妓一瞥」、文芳主編『娼禍』・中國文史出版社、2004。
- 石方・劉爽・高凌、『哈爾濱俄僑史』、黑龍江人民出版社、2003。
- 阿南、「舊北京的八大胡同」。文芳主編、『娼禍』、中國文史出版社、2004。
- 又吉盛清、『日本植民地下の臺灣與沖繩』、臺北：前衛出版社、1997。
- 魏長海、「一個妓女眼中的窟子胡同」、文芳主編『娼禍』、中國文史出版社、2004。
- 程惠茵、「婦女淚」、文芳主編『娼禍』、中國文史出版社、2004。
- 平襟亞、「舊上海彪大的娼妓隊伍」、文芳主編『娼禍』、中國文史出版社、2004。
- 賀蕭、『危險的愉悅：20 世紀上海的娼妓問題與現代性』、江蘇人民出版社、2003。
- 哈爾濱市地方誌編纂委員會、『哈爾濱市誌・人口』。1999。
- 哈爾濱特別市公署、『哈爾濱特別市戶口調查結果標 第二卷第二輯（職業）』、1935。
- 「滿洲職業分類式」、『滿洲統計』第1卷第10號、滿洲統計協會、1935。
- 菊池秋四郎、『哈爾賓と奉天（奉天の部）』、滿洲視察東道社、1934。
- 菊池秋四郎、『哈爾賓と奉天（哈爾賓の部）』、滿洲視察東道社、1934。
- 菊池秋四郎・中島一郎、『奉天二十年史』、奉天二十年史刊行會、1926。
- 宮川善造、『人口統計に見たる滿洲國の緣族複合狀態』、滿洲事情案內所、1941。
- 渡邊巖、「國都の營業形態」、『滿洲統計』、第12號、滿洲統計協會、1935。
- 滿洲國史編纂刊行會、『滿洲國史・各論』、謙光社、1973。
- 滿洲事情案內所、「觀於數字新京」、『滿洲統計』、滿洲統計協會、1936。
- 滿洲事情案內所、『國都・新京』、1933。
- 福昌公司調查部編、『滿蒙通覽（中編）』、東京：大阪至號書店、1918。
- 奉天商工會、『奉天產業經濟事情』、1942。
- 奉天商業會議所、『奉天經濟二十年誌』、1927。
- 奉天市公署・奉天市商工會、『奉天市統計年報』（1941～1942 年版）、1943。
- 宋連玉、「日本の植民地支配と国家的管理売春：朝鮮の公娼を中心にして」。『朝鮮史研究会論文集』、32、1994。
- 宋連玉、「大韓帝国期の〈妓生団束令〉〈娼妓団束令〉」、『韓國史論』、40、1998。
- 新京地方事務所勤業係、『新京發展事情概況』、1934。
- 新京地方事務所勤業係、『新京の現況』、1935。
- 野田涼編、『奉天居留民會三十年史』、奉天居留民會、1936。
- 尹明淑、「日中戦争期における朝鮮人軍慰安婦の形成」。『朝鮮史研究会論文集』、32、1994。
- 竹村民郎、「公娼制度の定着と婦人救済運動」、『環』、10、2002。
- 倉橋正直、「滿洲の酌婦は内地の娼妓」、『愛知県立大学文学部論集（一般教育編）』、第38號、1999。
- 戸川猪佐武、『素顔の昭和 戦前編』、角川文庫 緑481、1981。